

金時鐘『長編詩集 新潟』と「日本語への報復」の関係

――変身と道、可視化する「声」たち――

一 はじめに

在日朝鮮人の詩人である金時鐘のエッセーや講演録に目を通すと、その思想においていくつかポイントがある。その中でも中心になるものとしては、やはり植民地支配期における経験の中で彼自身の身体に刻み込まれた言葉への批判的意識、彼の言葉で言うところの「日本語への報復」、を指摘すべきだろう。これについてはエッセーなどで度々語られているが、次の箇所を引用しておきたい。

あくせく身につけたせちがらい日本語の我執をどうすれば削ぎ落とせるか。訥々しい日本語にあくまでも徹し、練達な日本語に押れあわない自分であること。そ

呉^オ 世^セ 宗^{ジョン}

れが私の抱える日本語への、私の報復です。(……) 日本に押れあった自分への報復が、行き着くところ日本語の間口を多少とも広げ、日本語にない言語機能を私は持ち込めるかもしれません。その時、私の報復は成しとげられると思っています。⁽¹⁾

読まれるとおりこの「報復」は、植民地期に皇国少年として「得意な日本語の少年」⁽²⁾であった詩人の、自己対峙を通じて自己解放に向かう志向であるだけでなく、日本語との格闘とその変質につながっていてもいる。

金時鐘に「報復」という観念を芽生えさせたのは、彼自身が述べているように、「短歌的抒情」の否定や「歌と逆に歌に」という命題を含む小野十三郎の『詩論』⁽³⁾であり、

时期的には一九四八年頃だと思われる。しかしながら公共の場で「報復」について発言を始めたのは、組織の圧力もあって、大体一九七〇年代に入ってからだと考えられる。(4)
(ちなみにエッセー集『在日』のはざままで⁽⁵⁾)の中で一番早い日付を持つエッセーは一九七〇年一月となっている。) 例えは一九七一年に安岡章太郎、金達寿との対談で金時鐘は次のような発言をしている。

僕の損傷させられた僕の人格の最たるものとして、僕は自分の国語を押しやった日本語があるわけであって、その日本語を僕が駆使するということは、日本語に対する最大の復讐だと、いわば日本人に対する復讐でもあると思うのです。僕の日本に対する復讐⁽⁶⁾というのは、日本語でしか形成しえないものを持っている。

金時鐘の詩作において中心に位置するこの「日本語への報復」というテーマは、残念なことに、言及されることはあっても作品に則って論じられる事は意外と少ない。近年ようやく論じられ始めてきた感のあるテーマと言える。このテーマを作品論的に論じてこそ彼の詩的言語の独自性が

考察され、「報復」の内実を捉えうると考える。また捉えた内実を軸に、諸作品に渡り彼の思想の再構成が可能となる。それはひいては金時鐘の体系的研究の基礎構築に寄与するだろう。

本稿が検討の対象とするのは、金時鐘の第三番目の詩集『長編詩集 新潟』⁽⁷⁾である。というのも『新潟』は、「日本語への報復」⁽⁸⁾についての発言と时期的に隣接している作品だからである。したがって本稿が検討する具体的課題は、金時鐘の言う「日本語への報復」と『新潟』との関係、『新潟』における「報復」の現われを、作品内在的分析を通じて論じるということになる。

この日本語で書かれた一八〇ページにも及ぶ詩集は、朝鮮半島を南北に分かつ北緯三八度線が新潟にもかかっていることから、日本においてその「宿命の緯度」^{三二八}をいかに越えていくか、を詩的に思考し表現した作品と言える。この作品は金時鐘の詩集の中でも取り上げられ考察されることが多い。しかし金時鐘に関する研究が多いとはいえない状況の中で、また詩的表現におけるリアリティの豊かさゆえにか、金時鐘の現実的経験と文学作品としての『新潟』を同一化して、作家論的に論じる傾向が強いように思

われる。比較的最近の細見和之「金時鐘詩集『新瀉』論」⁽⁹⁾も、金時鐘自身が経験した済州島四・三事件についての最近の発言と符合するような章が『新瀉』に存在することのインパクトを受けて書かれたものであるが、新たな再読の契機を作りつつも、その経験と詩作品を同一視しすぎているきらいがある。

しかし、作家の意識に重点がありつつも「報復」を中心において論じた重要なものに倉橋健一「朝鮮語の中の日本語—金時鐘に触れつつ」がある。⁽¹⁰⁾この論は一九七二年に書かれており、『新瀉』へのかなり早い応答であったと言える。

倉橋はその中で「日本語をまるごと喩として投射しよう」とするのが「報復」ではないかと述べている。⁽¹²⁾敷衍すればこれは、「規範的な言語」としての「闊達な日本語」が構成する「現実性の幅」に、「不完全な日本語」としての「独自の言語」が産出する「幻想性」の領域を対置する行為として「報復」が描かれていることを意味する。⁽¹³⁾つまり「喩」とは、明示的とみなされる構成的現実を、暗示的なものへの変換の試みと言えり。それはまた「自己表出の言葉」とも別のところで言い換えられている。⁽¹⁴⁾

ところで日本語においてこの「独自の言語」を「自己表出」するには、民族的な「原初的なもの」(金石範)を受け入れることから金時鐘ははじめなければならなかった、と倉橋は指摘している。確かに規範的な日本語が構成する「現実性の幅」に違和感を持ち、不完全な日本語で表現するには、そのような「原初的なもの」が契機として必要であるかもしれない。⁽¹⁵⁾しかし皇国少年として育った金時鐘にとって、「原初的なもの」自体が日本語を通じての歪んだ形を帯びているのではないだろうか。「解放後、必死の思いで朝鮮語を覚え、それによって民族的自覚が呼び覚まされてきたにもかかわらず、日本語という、原初的な民族意識を閉ざしてきた言葉は執拗にも馴れ合った知覚をそのかして、物事の是非をいちいち自分の天秤に乗せながらののです」。⁽¹⁶⁾だとすれば無批判的に「原初的なもの」へ依拠することは不可能だと思われる。むしろ高野斗志美の次の発言のほうが、詩作の困難さの真相に近いだろう。「金時鐘にとって、生きるとは、記憶とのたたかい、その意味をうばい、そして、純粹な声を現在に立てることもある。なぜなら、記憶に狎れることも、また日常性の仕組みに他ならないからである」。⁽¹⁷⁾もちろん現実性と幻想性と

いう区別を立てることによって、日本語まるごと喩化するのではと指摘しえたのは慧眼であろう。また当時、金時鐘自身多くを語っていないと考えられるため、以上の批判は厳しすぎよう。しかしながらここで確認しておきたいことは、「原初的なもの」と「自己表出」の間に無批判的な関連や連続性があるというわけではないこと、むしろ「原初的なもの」の内にすでに「日本語への報復」が介在せざるをえないということである。したがって表出されたものにおいて「報復」行為の成功や失敗等が論じられる必要があらう。そのため倉橋の「日本語をまるごと喩として投射しようとしている」というテーゼは、作家の内面に依拠する解釈ではなく、作品内在的な解釈を通じて「報復」を論じる限りで正当であり、又本稿の結論的な部分と重なり合う。私は『新潟』を作品論的に分析するにあたって、「道」という語と変身というテーマないし方法に焦点を当てて論じていきたい。というのも「道」は『新潟』の中で中心的な役割を果たしているからである。この作品において「道」は、「私」の固有性を奪い「私」を私ならざるものへ変身させてしまう暴力の象徴として描かれている。金時鐘はそのような「道」自体を問い、その質を詩的に転換しよ

うと試みている。そして「道」を変質させるために金時鐘が用いるのが、変身という方法である。具体的には「みみず」や「蛹」、「唾蟬」といった小動物系や昆虫系あるいは「小石」や「化石」といった石系への変身である。後に述べていくように、それは小動物や昆虫などへの変身が同時に日本語への変身であるような方法であり、そのことを通じて日本語それ自体を日本語の作品の対象として扱うことを可能にする方法となっている。

金時鐘の詩における変身や道に関する先行研究は多いとは言えないが、変身を扱ったものとしては鶴飼哲「時間の脱植民地化 金時鐘の『化石の夏』を読むために」⁽¹⁸⁾がある。鶴飼は金時鐘の詩作を、日本による時間の植民地化からの「時間の脱植民地化」⁽¹⁹⁾として捉え、彼の詩の中での「化石」や「石」あるいは動物や植物との同一化について示唆に富む考察を行っている。また宮沢剛「金時鐘の詩を読む」⁽²⁰⁾は今後なされていく金時鐘研究の基軸となるだろう論考と考えられる。宮沢は、金時鐘の詩の言葉が言葉の背後の含意を断ち切るものであり、それによって言葉が「変身・飛躍する」⁽²¹⁾と述べている。宮沢論文は以上の点も含めて非常に豊かな分析を施しているが作家論的な視点を主軸にすえて

おり、道と変身については最後に示唆的に論じるに留ま
ている。また先ほど指摘した細見和之「金時鐘詩集」新
潟『論』も『新潟』の中の「みみず」を中心に変身を扱っ
ている。

私はこれらの先行研究によって示唆されたものを手がか
りに金時鐘の道と変身を巡る詩的思考を問うていく。その
ため第一部「雁木のうた」の一、二、四章そして第三部
「緯度が見える」の四章を、その中でも変身と道に関わる
部分に限定して検討していくことにしたい。

二 道と光

まずは道について述べられた第一部「雁木のうた」の冒
頭を引用する。

目に映る／通りを／道と／決めてはならない。／誰知
らず／踏まれてできた／筋を／道と／呼ぶべきではな
い。／海にかかる／橋を／想像しよう。／地底をつら
ぬく／坑道を／考えよう。／意志と意思とが／かみ合
い／天体をもつなく／ロケットの／マッハの空間に／
道を／上げよう。／人間の尊厳と／知恵の和が／がっ

ちり組みこまれた／歴史にだけ／ぼくらの道は／あけ
ておこう。／そこを通らなければならぬ。三〇五―七

「道と決めてはならない」と「道と呼ぶべきではない」。こ
の否定はいわば「道」に関する判断停止であり、反省的な
問い直しである。この二つの否定は、最初のものは視覚に
依存する「道」の現象学的還元であり、第二の否定は
「道」の自然性あるいは「道」に関する自然的態度のそれ
と言える。緊密に結びついているのをあえて二つに分節し
たのは、第一の還元によって「道」の持つ「光」の問題が
詩的に浮きあげられ、第二の還元によって「道」が持つ非
人称的な一般化の力と軍事的暴力という本性が見出される
こととなるからである。第二の還元から見れば、まず
「誰知らず踏まれてできた」「筋」＝「道」に「ぼくらの
道」が対置されている。このことから見えてくることは、
「筋」＝「道」が「ぼくら」の排除において、固有性を持
たない一般的な「誰か」によってつくられたということであ
る。言い換えれば「筋」＝「道」とは、一般的で非人称
的な普通名詞「誰か」によって踏みつけられてきた痕跡
と言える。しかし一般的な誰かといってもそれは中立的な

存在というわけではない。なぜならその「筋」Ⅱ「道」は、「軍靴」^{三〇七}や大通りを去来する「ジープ」^{三〇七}の轍によって跡付けられているからである。つまり「筋」Ⅱ「道」は人為的な暴力性を帯びており、「ぼくら」と「誰か」の排他的な関係を支配・被支配の権力関係に置く境界線の機能を果たしている。だからそのような「道」を道と名付けることが拒否されていたのであり、梁石日も「金時鐘論」で、「金時鐘の詩はのっけから〈道〉の自然性・擬態を拒絶したところからはじまっている。」と指摘していたのである。しかし「道」の持つ「光」の問題を見なければ「道」については不十分である。

「道」と同様に「光」は、軍事的暴力の保有者によってもたらされている（千万燭光の／アーク灯をかざし／白昼夢は／西から／海をわたって／軍艦でやってきた。」^{三一―}）。先ほど述べた「道」が形成する境界線は、「誰か」と「ぼくら」に対応するように視覚／盲目、昼／夜という二項対立も作品中で形成している。これらは抽象化すれば光と闇の対立である。つまり「光」は闇を生むことで光と闇を分け、それが「誰か」と「ぼくら」等も分かるところから、「筋」としての機能も果たしている。このことか

ら「光」とは「筋」Ⅱ「道」であり、したがって境界線として機能する「道」は、対立項を刻印し階層化する光の暴力でもあったのである。

そのような光と闇の関係は諸対立の基礎と言えるが、それは静態的に安定しているわけではない。「漆黒の闇にもまして／漂白された夜の／果ては／きわめもつかぬものなのだ。」^{三三}という表現に見られるように、暴力的にもたらされる「光」は、光／闇という基礎的対立を無化するかのように対立項を自らの内に取り込んでいく。つまり光の外部としての闇は内部化された外部でもありえ、内部と外部の関係にも階層的な秩序は侵入してくる。その外部をも包摂しつつ諸対立項を階層的秩序として構築する光は、「太陽」^{三五}という超越的シニフィアンによって頂点に至っている。つまり「光」は、諸対立の境界線となる「道」を補強するだけでなく、固有性を奪いつつ次々に諸対立を生成し、「太陽」という頂点を根拠に整除する力を持っているのである。

このようなシステムから抜け出るには、別様の外部や「道」を見出す必要があるのだろうが、以上のような「道」に対して、道の価値変更あるいは道の概念の拡大化が先の

引用で宣言されていたと言える。すなわち海、地底、宇宙空間という場における道の追求である。陸から海にかかる橋を介して他なる陸へ、地表から地底をつらぬく坑道を介して他なる地表へ、そして天体から道としてのロケットを通じて他なる天体へ至ろうとする途方もない道の思考がここから開始される。そのような道が結果的に「ぼくらの道」となりうるものである。宮沢剛は『新瀉』の冒頭に表れる「坑道」が「筋」の変質であり、それゆえにこの冒頭は「変身・飛躍の詩学」として読めると指摘している。本稿においてもこのイメージを新たな〈道〉の指標にしたい。また便宜上、制度的な道を「道」と表記し、新たな道を〈道〉として以下表記する。

三 「みみず」への変身と日本語―横断と交換

「光」―「道」がもたらす差異の一つに人間と(小)動物の区別がある。これによって「ぼく」は最初の変身を遂げる。

生涯をかけて／あの明るさを／ぼくは忘れられるだろ
うか?!／(……)／彼らは／いつも／生身のまま／人

間を変える。／すっかり／毒気をさらした／アラジンのランプで／ぼくはとうとう／みみずになった。／明かりへの／おののきは／太陽まで／いみきらう／日陰者に作りかえたのだ。／それ以来／ぼくは／道をもたない。／しつらえてある／道の／一切を／ぼくは信じない。三四六

「光」を受けて、「ぼく」は盲目な「みみず」に変身する。光／闇に対応する、人間／動物というこの恣意的な区別による変身は、その暴力性故に「ぼく」の固有性の排除となっている。それ故この人間と動物は、構造言語学的な消極的差異による示差的関係によって強く規定されている。

つまり人間とは、動物ではないものとしての記号的存在「人間」なのであり、「人間」はその価値をアプリアリに持っているわけではない。むしろ「人間」は「道」以前には存在しない。「規制しうる／通路はあっても／その規制からはみでる／人間はありえない。」三〇九。したがって固有性を奪う「光」の根源的な暴力は、非人称的な記号化を施すものであり、そこから「道」―「光」は、示差的体系としての言語のメタファーとしても読める。

しかし「動物」の側にある「みみず」に「人間」と全く同様の事態が起きているとは言い難い。「ぼく」は、「道」―「光」によって小動物の側に分類され、「みみず」として刻印される。この時の「みみず」は、みみずではないもの（「人間」との関係において「みみず」であるのだから、固有性を剥奪された記号的存在と言える。これは先ほどの「人間」と同様の事態である。しかし他方で「みみず」への変身は、その盲目性と先ほどの「道」の拒否とが相まって、「道」と「光」が引く境界線を無実化してしまう可能性を、したがって「道」に従わない横断可能性をも得ることになる。だからこそ「みみず」は「道を持たない」のである。そのため「道を持たない」「みみず」は、「変態への可能性を秘めた、つねになにかになる手前の未然的なイメージ⁽²⁴⁾」となり、言語の内部に所属すると同時に、その外部にはみだしてしまう言語的存在と化する。つまり「みみず」は、日本語ではない「日本語」として日本語の境界に位置するのである。

しかし「未然的なイメージ」となりうるのは、横断、すなわち自己の「復活」三二八をかけた「環形運動」と組み合わさる場合においてである。

アーク灯に／おびえ／地層の厚みに／泣いた／宿命の緯度を／ぼくは／この国で越えるのだ。／自己呪縛の綱のはしがたれている／原点を求めて／貧毛質の胴体
に血をにじませ／体ごと／光感細胞の抹殺をかけた
／環形運動を／開始した。三二八九

「環形運動」とは、さしあたり、「光感細胞」を「抹殺」すること、非人称的記号として刻印してくる「光」による強制的恒常的な変身から、意思的で自在なそれへの転換の試みを指す。「みみず」の「環形運動」とはその転換行為のイメージであり、それが掘り進んだ穴―跡は自在な変身の痕跡と言える。そしてそのように掘り出された跡こそが、先の「ぼくらの道」＝〈道〉につながっており、〈道〉としての「坑道」や「橋」と重なり合うことになるのである。その意味で「みみず」の「環形運動」とは〈道〉の弱々しい提喻とも言え、〈道〉の第二のイメージともなるものである。

ところで「みみず」が日本語の境界に位置するとしたことまでの論述は、金時鐘の詩をマイノリティがマジョリティの言語を用いて生み出す「マイナー文学」に位置付

け、それが「差異が軋み合い、ざわめき合っているような言語の原初的エレメント」を切り開くという守中高明の指摘⁽²⁵⁾とも響き合っている。しかし「みみず」が置かれている状況を考察しなければ、そのような規定は、言語の戯れを楽観的に指摘するに留まるだろう。この異常な「日本語」は日本語とどのような軋轢をきたしているのだろうか。

おそらく／故人は／子息に／これだけを／残したであろうような／ロクロに／ゆわえられて／小指ほどの／真鍮棒が／くねる。／信管の／ネジを切りながら／その異様な／細さに／すっかりへたつた／つんつるんの／指先が／指であることを／忘れてしまう。／感触のない／思考は／そこひの／角膜に似て／昼夜の／明暗をさぐる程度の／映像を／うかがうのである。／これが／親子爆弾の／子爆弾の／信管の／ネジ／である。三九二

この部分の作品の中での状況設定としては、「小松製作所」^{三三}からの孫請けの仕事をする在日朝鮮人の家庭があり、親の代から始まるその仕事はネジの製作である。そ

のネジは朝鮮戦争で使用される爆弾の一部となってしまうものである。しかしネジが爆弾に変わるという想像力は、生活に迫られることで薄らぎ、働かなくなっている。この箇所は現実の在日朝鮮人の置かれた状況を活写したものであるとしてだけ読まれることがあるが、それ以上の内容を含んでいる。

「ネジ」となる「小指」のような「真鍮棒」と、「指であることを忘れてしまう」ほど「へたつた」「つんつるんの指先」とがここでは換喩的な関係で結ばれている。また指と真鍮棒とを区別し得えなくなった「感触のない思考」は、「角膜」のように表層に浮き上がり、思考が角膜のように、角膜が思考のようになり、指のようなネジ、ネジのような指の戯れの中に紛れ込んでいる。結果これら一連の表現において、「真鍮棒」―「つんつるんの指先」―「角膜」―「思考」が表層において絡み合い、無秩序に戯れていると言える。そのような中で「ネジ」は身体的であると同時に精神的なものとして切り出されている。その上に「これが／親子爆弾の／子爆弾の／信管の／ネジ／である。」という詩句によって、子爆弾の最小単位であろう「ネジ」が日本語の音素「で／あ／る」と視覚的イメージによって

重ね合わされ、その結果「ネジ」は言語とも隠喩的に関係を結んでいる。ここから身体的精神的な「ネジ」は、削り形を整えられうる可塑的な言語でもあると解釈できる。つまり「ネジ」は、生活を支える貨幣と交換されるだけでなく言語としても交換されるのである。ただしこの交換は、交換不可能性を経験することなしには成立しない。なぜなら「ネジ」は「規格外れ」でもありうるからである。「ネジ」製作の「百の単位を／往復したころ／万の位をかけて／規格外れが／戻ってきた。」^{三三八}。以上論じてきたことからすれば「規格外れ」の「ネジ」は、日本語の「規格外れ」としての「日本語」の隠喩であると言えるだろう。したがって「ネジ」は「日本語」と日本語の間で交換されるのである。

新たに作られる「日本語」が「規格外れ」となるのは、明らかにそれが計算不可能で正常な日本語ではないからである。ここに正常／異常という基準が入り込んでいることは見えやすいことだが、重要なことは、基準の制定と判定をする側に「ぼく」が関与していないことである。これは「道」の形成と同様の事態と言え、日本語における正常／異常という基準は恣意的であるだけでなく、優位／劣位と

いった植民地的な位階関係も入り込んでいると言える。このことは間接的に次の詩句によって確認できる。「ポルトガル人の鞭に／立ちすくむ／ゴム採取人。」^{三三九}。

ところで日本語に属しきらない「日本語」としての「ネジ」は、その点で「みみず」と連関するのだが、この「ネジ」＝「みみず」が形成する交換可能性には、あるアポリアが存在する。一方で「ぼく」が正しい日本語と正常な交換をすることは、「みみず」という内部的でもあり外部的でもある「日本語」を、正常な制度内で流通する非人称的な普通名詞へと変質させその外部性を抑圧するように働いてしまう。他方で「ぼく」の「日本語」が他者に異常と認識されることは、正常な日本語という観念を補強するように機能する。つまり交換という制度は日本語の同一性とその正常性を強めていくのである。「みみず」が交換可能な日本語として日本語になれあうことは、「蛭」に変身してしまう危険を持つことである。

待て。／これはどう見ても／沼だ。／ぼくの／みみずからの／脱皮は／蛭への／変身かも知れんのだ！／ぬかるむ／湿気のなかで／這いずりまわる／ものがい

る!／出る。出る。／壁といわず／天井といわず／黒
光る／蛭が／いる!／近眼鏡の／おぼつかない／視力
に／全身／蛭と化して／たかられている／俺／が／い
る! IIII O—1

「蛭」とは、なれあうことで日本語という「沼」に沈み込
んだ「みみず」の、固有性を剥奪・回収し非人称化する動
物である。その点において「蛭」はすでに述べた「光」と
しての「昼」でもあり、「蛭」と「昼」は音のみならず機
能的にも連携している。すなわち「蛭」とは、固有名詞か
ら普通名詞へ移行させることで「日本語」を抑圧し、日本
語を強固にする交換システムの形象なのである。そしてこ
の移行が機能するからこそ「ネジ」や「指」や「思考」が
感触のないままに表層的に戯れだし(なぜなら非人称化す
るから)、「ぼく」を「沼」に引きずり込むことになるので
ある。このアポリアがある限り、「みみず」は常に「蛭」
へ変身する危険にさらされている。以上が「みみず」の置
かれている状況である。したがって先の守中の言説はこの
アポリアを問うてこそ内実を伴うものとなるだろう。この
アポリアを論じる前に、「蛹」について見ておきたい。

四 「蛹」と日本語―停滞と「日本語への報復」の 発現

「蛹」という語が詩集の中に現れるのは第一部四章であ
る。四章の前半部では「蛹」を中心にしてその周りに
「霜」、「繭」、「蝶」、「蛾」といった語が配置されている。
それらはまた冬、春、夏の季語としても用いられており二
重化されている。金時鐘の詩作を「時間の脱植民地化」と
いう観点から読めるとした鶴飼哲は、その手法の一つに季
語への抵抗を挙げているが、「蛹」においてもそれが複雑
な形で現れている。まず冒頭の部分を引用する。

霜は／光をくるんで／冬ごもる／思考を／丸くする。
／うっすら／西陽さす／かいこ棚に／したたる／桑の
みどりを／夢見つづけた／住人が／繭となった。／銀
糸を／たばね／北上する／シルク・ロードを／枯渇し
た／繭の／羊水の中で／敷いていた。／蛹への／停滞
だけが／彼我の価値を／一にしうる。三四八―九

「霜」による「思考」の球体化と、「住人」の丸みを帯びた

「繭」への変身は、球体のイメージによって連続性が感じられる。しかしこの柔らかなイメージとは裏腹に、この変身においてある断絶と隔絶が暗示されている。「霜」は冬の季語であり「繭」は夏の季語であるが、「霜」によって「繭」へ変身することは、季節の流れからすれば冬から春を飛び越えて夏へ昇華することである。だから「住人」は春の季語でもある「桑」を「夢見」ているのである。つまり「繭」にとって春はいつでも遠いものなのである（「春は遠い。」三五）。また「霜」という膜によって覆われることで外部と隔絶されている「繭」にとって「いつも／春は／外でだけ／はじめて」^{三五三}おり、夏は「繭」内でのみありうる季節となっている。⁽²⁸⁾

詩句において「繭」から、次に、その中にいる「蛹」（「蛹」も夏の季語である）へ視点が移動する。では以上の状況の中で「蛹への／停滞だけが／彼我の価値を／一にしよう」とはいかなることであろうか。「蛹」も「繭」の中にいるが故に「春」から常に遠くある。そのため「蛹」は、「繭」の状態を経由しないだけでなく春の季語でもある「蝶」にはなれない。この季節の断絶によって「蛹」は、「蝶」ではなく、似てはいるが異なり、夏の季語でもある

「蛾」として孵化してしまう歪さをこの保持している。その部分を詳しく引用すると、

保証された／熱量のなかで／ぼく自身が／甦ったとしよう。／いまわしい／翅の／代償に／万もの分身を／産みつけ／百花繚乱の／歓喜へ／まざりこむ。／（…）／蜜を／たくわえるでなく／ただ／蝶でありうる／証のためにのみ／舞い狂う／蛾の／映像。三五一—

三

「保証された／熱量のなかで／ぼく自身が／甦ったとしよう」とは、冬から夏に一息に移行するのではなく、春という時間が保証され、その与えられた時間内で正常に孵化することの仮定である。もちろん誰に、何によって保証されるのか、春が保証されるとはいかなることかは問われるべきことだが、ここでは「蛹への停滞」を論じるにあたって「蝶」と「蛾」の関係にもう少し注目しておきたい。春の季語「蝶」と夏の季語「蛾」の関係は、春と夏の関係と言い換えることができる。しかし仮定された孵化が「蝶」ではなく、「舞い狂う蛾の映像」として「蛹」の中で現出し

ていることからすれば、その関係は確立した項の関係というよりも、重なりながらも完全に重なり合うことがない類似的関係である。そのような類似において「蝶」ではなく「蛾」に、春ではなく夏に変質してしまうのだとすれば、変質以前の「蛹」の状態で「停滞」するとは、「蝶」と「蛾」を、春と夏をこの空間内で混濁させつつ、未分化のまま一に保ちつづけることである。つまり正常な時間の円環的な流れ(冬→春→夏……)に対し、「停滞」することで時間の異常化を引き起こし「彼我の価値」を一つにするのである。

したがって「停滞」とは単なる滞りではなく、「停滞」する意志である。以上を踏まえるならば、本章の最初で引用した「銀糸を／たばね／北上する／シルク・ロード……」とは、この「停滞」による新たな時間形成の〈道〉を暗示している。

そのような「停滞」状態にある「蛹」＝「ぼく」は「原形」「塑像」として、次のように表現されている。

にぶい／乳色の／残光にくるまれて／ぼくは考える。

／古代エジプトの／立像のように／永劫／原形でしか

ないであろう／自己について／その塑像の／歪つさに
／おびえる。三五三四

「塑像」というイメージからすれば、「蛹」の未分性は多義の包摂というより、存在の在りようの決定不可能な状態を示している。引用ではネガティブなニュアンスで描かれているが、これまで論じてきたことを踏まえれば、決定不可能性とはいかようにも変身可能であるということであり、そのような状態にとどまり続けることは、消極的差異によって織り上げられる言語体系を揺るがし続けることだと見える。つまり「蛹」はその自在さにおいて、季節だけでなく差異の体系全体を自己のうちに集中させていき、異化を施しその発現を待機する昆虫と見えよう。

この「蛹」は正常な時間の観念や正常な日本語にも回収不可能な昆虫として、言語体系からはみだすことで言語の縁に位置付けられていた「みみず」と強い連関性を持っている。故に前述したアポリアは「蛹」のアポリアでもある。しかし「みみず」においては運動、「蛹」においては「停滞」という違いは留意せねばなるまい。

ところで第一部四章で「蛹」と「女」の関係は見逃すこ

のできないものである。しかし本稿では変身や道について論じているため、「女」という形象については簡潔に触れるだけに留めたい。第一部第四章では二人の女性が現われる(「女」と「妻」)。ここでは「女」あるいは「夫人」に注視したい。「女」は池で飼っている「緋鯉」の餌とするために「蛹」をすりつぶす者として登場する。

から揚げにした／蛹の／大群を／小脇にして／夫人は
／艶然と／笑った。／春は遠いのよ。／すけるような
／指先に／からまれて／蛹のつぶが／他愛もなく／午
後の／陽だまりに／すりつぶされる。三五〇—

「緋鯉」の餌となる「から揚げ」とは、ここまで論じたことからすれば、「蛹」の未分化な「原形」がもつ自在さが破壊され、食われることで正常な交換に強制的に組み込まれることを指す。

そのような「蛹」(たち)をすりつぶす「夫人」とは、決定不可能性を排除し、非人称化のシステムに組み込む存在と言えらる。「夫人」が「女」という非人称的な総称で言い換えられることもこのことを補強しているだろう。また、

第一部第四章の中で発話として表現されている部分「春は遠いのよ」三五〇、「あなたが孵るには／まだ間があるわ。」三五三、「まだ殻をかぶってるの?!」三五五を見るならば、

発話は「蛹」の外で「女」によってのみなされている。「ぼく」も、「蛹」から「女」に孵えしてもらう時に発話を行っている。そこから「女」はパロールの所有者、言語運用をつかさどる象徴としてあると言えるだろう。以上のことから「女」とは、先ほどの「ネジ」と並ぶもう一つの日本語の比喩と見なしうる。

以上の「蛹」と「女」の分析を踏まえ、先に示したアポリアの克服を「蛹」の側から論じていきたい。「蛹」はどのように「女」に抵抗することでアポリアを乗り越えようとするのだろうか。逆説的なことであるが、抵抗は「蛹」が「女」との主従関係を耐え抜くこととなされる。つまり「女」に孵化してもらおうことである。

ぼくを孵せるのは／あなただけです!／(…)／正体を／さらして／白日に／おどろいだのだ!／まあ!同類だわ!／未分化の／軟体物を／放りあげ／虚空に屈折する／原色の／翅。三五六—七

このことが抵抗となるのは、「蛹」が未分性、決定不可能性が保持したまま(未分化の軟体物)、「原色の翅」孵化するからである。それは「女」≡日本語に翻訳されるがままにありつつも翻訳不可能に留まることである。言い換えれば「日本語」のまま日本語の差異のシステムに自らを組み込み、一義的な意味の確定や純粋なパロールを妨げることである。そしてこの不純さは、「すべての飼われるもの」(例えば「緋鯉」)にその決定不可能性の影響を波及させ、消極的差異による送り返しの構造を描るがすことで、言語体系を丸ごと転倒させる可能性ともなりうる。だからこそ「ぼく」は同じく飼われるものである。「緋鯉」に食われる「命運」を拒否しない。むしろその「命運」を逆手に取ることで「ぼく」は自らの再生を賭ける。

蛹の命運を／拒否することが／少なくとも／緋鯉を憎みきること／同義語であってはなるまい。／すべて／飼われるものとの／連帯に徹する／背徳こそ／望ましいのだ。／そう！／あの女自身を／飼いきろう！／忍従の／極地がおりなす／主従関係の／倒錯を／よもや／知るまい。／完全に／女が／ぼくを支配すると

き／はじめて／主人でありうる／ぼくの日が／約束される。／(……)／緋鯉よ／お前に喰われるなど／背徳ではない！三五四—七

だから梁石日が次のように述べたのは正しかったと言える。「(…)『新濁』は、自己解体と自己再生を賭して日本語の喩の世界を奪い、解体し、言葉の武器としてつきつけ再生される⁽²⁹⁾」。しかしそれは「みみず」と同様に、常に危険と隣り合わせである。なぜなら、「蛹」が歪な「塑像」から脱し、それが「蝶」のような「蛾」であったとしても、消極的差異のシステムに組みこまれることは、決定不可能性を喪失する危機だからである。それは自己を「抹殺」する危険にさらすことである(「うごめく闇の／自己が／自己でなかったかのように／自己が／喰い破る／現実ですら／与えられた／自己抹殺への／糧食⁽³⁰⁾でしかない。」^{三四九—五〇})。しかしそのような危険を冒してでも変身に賭けられていたものは、この日本語そのものの全面的な転倒の試みであったと言える。

五 結びにかえて―変身と〈道〉

最後に、「停滞」としての「蛹」が運動としての「みみず」とどのように結び合っているのかを、第三部四章をふまえながら論じていきたい。それは「日本語への報復」と「環形運動」及び〈道〉との関係を論じることでもある。

「みみず」が体現していた日本語ならざる「日本語」は、第三部四章において「ことばのまえの／ひとつのことば」四六七として表現されており、具体的には「羽音」四六七や「電波」四六八として詩句に刻み込まれている。つまり言語の他者の「声」は、「羽音」や「電波」というほとんど翻訳不可能な「ことば」として認識されている。そのような「声」は、「電波」を発する「アンテナ」四六八を「声」の「墓標」四六八へと変質させ、自らを可視化させている。そのため「墓標」は「声」の死というよりも、聴き取られ解読されるべき「声」の形象、つまりエクリチュールとして在ると言える。また「羽音」は、その「アンテナ」に張り付く「唾蟬」四六九として可視化されている。「唾蟬」は、墓標にしろされた「声」を聴き取り、それを発話するかのよう「墓標」と結びつく。しかし「唾蟬」も声をもたな

い昆虫である。そのため発話不可能な「唾蟬」も「声」を宿したエクリチュールと言える。つまり「アンテナ」にしろ「唾蟬」にしろ、それらは声を持たず、また単なる鬱屈した内面の声でもなく（なぜなら内面の声も声であることに変わりはないから）、自らを可視化することのみ外部的な「声」を暗示する形象なのである。そのような「声」は宮沢剛が指摘するように「金時鐘にとっても通常表現不可能な領域⁽³¹⁾」に関わるものであろう。

ところでこれら一連の変身の諸形象は「隊伍」四七〇として作品中で示されている。注意したいことは、この声を持たない者たちの「隊伍」が、「声」のない世界としての「街」四七〇の路上、即ち「道」の上で組まれていることである。「隊伍」が「街」において「敵意にさらされた／標的」四七〇となっていることからすれば、この「道」は「声」と声の境界線となるだけでなく、「声」の可視化の禁止、「隊伍」の排除として機能する。裏返せば、排除されない「隊伍」とは、「道」の適正検査をパスした声である。そして適正性を持つ声は、交換可能な日本語（「貨物」として積み出されることになる。そのような「道」に従う拒否する「ぼく」は、光の及ばない闇の側に移行す

ることになる。

誰に許されて／帰らねばならない国なのか。／積みだ
 だけの／岸壁を／しつらえたとおりに去るとするのは
 滞る貨物に／成りはてた／帰国が／ぼくに／あると
 いうのか。／ moreover 音もなく／積木細工の／城が／
 崩れる。／切り立つ緯度の崖を／ころげ落ち／平静に
 敷きつもる／奈落の日目を／またしてもくねりだす
 のは／貧毛類のうごめきだ。 四七一―

「切り立つ緯度の崖」を転がり落ちた「ぼく」は、⁽³²⁾またし
 ても盲目なみみず(「貧毛類」)へ変身する。ここに反復が
 ある。つまり「みみず」への変身とは、「道」の拒否の度
 に起きる出来事であり、その意味でそれは変身の「起源」
 的な小動物である。そしてこの反復において「みみず」は、
 「太陽」を頂点とする「光」を引き降ろすことを願う。そ
 れは「道」を変質させることである。そのために開始する
 のが、「宿命の緯度」を「この国で越える」ために「光感
 細胞の抹殺をかけた」、あの「環形運動」である。

光など／地上のどこかで照ってさえいいい！／願
 いのうちにあるのが／祈りなら／仰げぬ太陽こそ／最
 たるぼくの憧れだ。／蛹を夢みた／みみずの入定が／
 夜半。／蟬のぬけがらにこもりはじめる。 四七三

この引用の中に動物や昆虫に関する語が三つ用いられてい
 る。「蛹」、「みみず」、「蟬のぬけがら」である。「蟬のぬけ
 がら」は蟬の痕跡であり夏の痕跡といえるが、その抜け殻
 から抜け出したものが、おそらく先の「唾蟬」なのだろう。
 そして「ぬけがら」が「蛹」との隣接関係を作ることで、
 「ぬけがら」にこもり「蛹」への変身を夢みる「みみず」
 も、「蛹」との隣接関係を形成することになる。そのよう
 にして「みみず」は「羽音」や「電波」というもたらされ
 るべき「声」の「原形」、「塑像」として機能し始める。ま
 た「蛹」は、「緋鯉」に飲み込まれた直後、自らを「小石」
 といった形象に凝縮させて結晶化している。⁽³³⁾「みみず」を
 論じた章で、「環形運動」を意思的で自在な変身であると
 指摘したが、このように見えてくると、それは「みみず」―
 「蟬の抜け殻」―「蛹」―「唾蟬」―「小石」……という
 ありえない変身の連続だったのである。

また「道」によって、繰り返し「みみず」に振り戻され、抜け殻、蛹……と連関していくということは、その軌道が円環を描いているということである。つまり「環形運動」は「みみず」から「みみず」へというサイクルにおいて、運動でありながらも「停滞」でもある運動だったのである。

この「停滞」は、「道」の拒否として、「蛹」と同様に「停滞」する意志である。その意志において抵抗としての変身・連関が拡大される限りで、この円環は螺旋状となる。

その意味で「停滞」は常に他なる様相を示す。「みみず」が「蛹」であり、「唾蟬」であり、「小石」等であるように。そのようにして変身行為としての「環形運動」は、「道」を越境、横断しつつ、少しずつそれ変質させていく。それは、言い換えれば、「みみず」が「蛹」として、「蛹」が「小石」として、「アンテナ」が「墓標」としてあるように、日本語を「まるごと」変質させるものである。そして最終的に「筋」||「道」が「坑道」に変わるとき、「ぼくら」の道||〈道〉がその固有な相貌を垣間見せるのである。したがって「道」を論じた章で引用した「海にかかる／橋」「地底をつらぬく／坑道」「ロケットの／マッハの空間に／道を／上げよう」という途方もない〈道〉のイメージ

ジは、「環形運動」の同一線上にあったのである。

この〈道〉の創出に至る変身行為としての「環形運動」こそが、『新潟』における「日本語の報復」とその方向性を与える詩的イメージとして、本稿の一番初めに引用した金時鐘の発言と呼応し合っていたのである。

おわりに

「環形運動」とは、危機の度に繰り返し「みみず」に戻り、自己を生き直そうとする再―蘇生の試みである。日本語を変質させるこの運動は、なれあいなしに「ことばのまへのひとつのことば」を立てようとするところにその本質的意味があると思われる。

『新潟』には、歴史に現われることのない歴史の他者の「声」が、そしてその持ち主の一人として金時鐘自身の「声」が一つ一つの詩句の中に見え隠れしていることは言うまでもない。本稿で示唆するに留まった「声」や、金時鐘の経験や記憶、そして『新潟』第二部以降の詩的展開を〈道〉の探求と直結する「日本語への報復」との関わりの中で、今後より深淵に分析していきたい。

- (1) 金時鐘「私の中の日本と日本語」、『金時鐘の詩 もう一つの日本語』(もす工房、二〇〇〇年)所収、一二四頁。
- (2) 前掲書一一一頁
- (3) 小野十三郎「詩論」真善美社、一九四七年
- (4) 残念ながら金時鐘が編集に加わっていた雑誌『ヂンダレ』は入手困難で全てに目を通すことはできなかった。
- (5) 金時鐘「在日」のはざままで 立風書房、一九八六年
- (6) 金時鐘、金達寿、安岡章太郎「文学と民族」、『文芸』一九七一年五月号、河出書房、二〇八頁
- (7) 金時鐘『長編詩集新潟』、構造社、一九七〇年。以下『新潟』と表記。また以後『新潟』からの引用は全て『集成詩集 原野の詩1965-1988』(立風書房、一九九一年)からであり、詩の引用についてはページ番号(漢数字)だけを示す。
- (8) 『新潟』が一九六一年の時点で完成していたという事実は、ここではさしあたり問題とならない。『新潟』が公の場での発言ともっとも緊密に関係していることには変わりがないからである。また本稿は「日本語への報復」についての厳密な時代考証的検討が主たる課題でもない。しかし『新潟』を「日本語への報復」に関して作品内在的に検討することは、時代考証的検討のためにも必要なことであると考える。また完成と出版のずれは、当時金時鐘自身が

所属していた日本朝鮮人総連合会と彼との確執によるものであるが、この確執や組織が抱えている思想の質については彼自身が何度か触れているし、当時行動をともにした梁石日もその金時鐘論の中で取り上げおり、重要なファクターではあるがここで取上げることが差し控えたい。

- (9) 細見和之「金時鐘詩集『新潟』論 和解の政治学に寄せて」、『現代思想』二〇〇〇年十一月号、青土社
- (10) 『新潟』に書き込まれた一九四八年済州島四・三事件については今回扱うことはできないが、とりわけ第二部「海鳴りのなかを」の中に見出すことができる。金時鐘自身の事件との関わりについては、金時鐘、金石範『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか 済州島四・三事件の記憶と文学』(平凡社、二〇〇一年)や「記憶せよ、和合せよ」(『語りの記憶・書物の精神史』社会評論社、二〇〇〇年、所収)の中で詳細に語られている。
- (11) 倉橋健一「朝鮮語の中の日本語—金時鐘に触れつつ、『未了生としての人間』(権の実書房、一九七五年)所収
- (12) 倉橋同書一四頁
- (13) 以上の括弧内は、「独自の言語」以外、倉橋のもの。「独自の言語」は金時鐘が金嬉老裁判のとき述べたもの。
- (14) 倉橋同書三〇頁。「自己表出」や「喩」などは、もちろん吉本隆明からの影響である。

- (15) この「原初的なもの」は、後に金時鐘が述べることに
なる「生理の言葉」に関連してはくるだろう。
- (16) 金時鐘他『金時鐘の詩 もう一つの日本語』、一八七
頁
- (17) 高野斗志美「金時鐘論―『原野の詩』との対話」(『資
料「金時鐘論」』金時鐘集成詩集『原野の詩』を読む会、
一九九一年、所収) 五七頁
- (18) 鶴飼哲「時間の脱植民地化 金時鐘の『化石の夏』を
読むために」、『応答する力 来るべき言葉たちへ』青土社、
二〇〇三年
- (19) 鶴飼前掲書二二八頁
- (20) 宮沢剛「金時鐘の詩を読む―読むことの「自由」と書
くことの不「自由」、『日本近代文学』第六九集、日本近
代文学会、二〇〇三年
- (21) 前掲論文一九七頁
- (22) 梁石日『アジアの身体』平凡社、一九九九年、一八四
頁。
- (23) 宮沢前掲論文一九七頁
- (24) 細見前掲論文二二三頁
- (25) 守中高明『脱構築』岩波書店、一九九九年、五四頁
- (26) 例えば松原新一・磯田光一・秋山駿『戦後日本文学
史・年表』講談社、一九七九年、一五九頁
- (27) 先に示した対談で、安岡章太郎は金史良の日本語を
「不完全な日本語」だとし、作家にとって「言葉は完全な
ものでなければならん」と述べているが、それもやはりこ
の恣意性に盲目な発言と言えよう。
- (28) 金時鐘自身の夏については、極めて重要な事柄である
けれども別の機会に論じたい。ただ金時鐘が「皇国少年」
として植民地期に日本語を必死に身につけたこと、八月十
五日が「解放」というよりも打ちひしがれるような事件で
あったこと、そのため彼にとつての解放は、日本語との格
闘しつつ自分の過去を見つめ続けることと直結している
ということ、などはエッセーなどで度々言及されている。重
要なことは記憶と言語そして自分自身の生が夏という時間
性の中に凝縮されていることである。
- (29) 梁石日前掲書一八一頁
- (30) 金時鐘の詩は、常にこのような危険を冒すことで紡が
れていると思える。
- (31) 宮沢前掲論文一九六一七頁
- (32) 『新潟』第一部において「浮島丸事件」のことが取り
上げられていることや、この作品が帰還事業のほぼ開始直
後に完成していたことを考慮に入れるならば、この「帰
国」がどのような帰国であるかは検討すべき課題であるだ
ろう。

(33) 「石」に関しての分析は今後の課題にしたい。ここでは簡単に触れるに留める。忍従を決めた「蛹」が「緋鯉」に飲み込まれた直後、作品において時間が不在に感じられるくらいかなりの時間的遡行がなされている。その結果「蛹」は、「グリーンタフの三紀層」^{三六二}と「古生代の古い地層」^{三六二}という空間化された時間のはざまに落ち込み、「小石」^{三五七}あるいは「化石」^{三六一}と化している。さらに時間的遡行において「女」との関係が「妻」との関係に変わる。

時間が空間化されるのは、時間の異常を引き起こす「蛹」の「停滞」が、時間を澱みなく流していくというよりも、垂直に積み重ねていくからである。また「蛹」からの変身である「小石」が「化石」でもあるのは、「小石」というその一点において時間がずれ続け、正常な季語的時間観念の最も近くにありつつ最も遠くにあるからである(「すぐね、春も!」^{三五七}、「春は遠いのよ」^{三五〇})。遠くにある分だけ「小石」は「化石」と化すと言える。次に古代的時間において「女」が「妻」と変わるの、意味の安定的産出者として、決定不可能性を保持し意義確定を先送りにする「小石」に、常に立ち返らなければならないからである(「わたしはあなたをはなさないわ!」^{三六五})。つまり「小石」とは「蛹」の異常性を結晶させた形象と見え

る。

鶴飼は「石」に関して次のような発言をしている。「あえて言えば、金時鐘さんの言葉は、(……)石にはらまれている時間を抱え込みつつ頭わにする、そういう言葉なんじゃないか。」鶴飼前掲書^{三二六}七頁

参考文献

金時鐘『集成詩集 原野の詩1955-1988』、立風書房、一九九一年

『在日』のはざままで』、立風書房、一九八六年

金時鐘他『金時鐘の詩もう一つの日本語』、もず工房、二〇〇〇年

金時鐘他『資料「金時鐘論」』、金時鐘集成詩集『原野の詩』を読む会、一九九一年

鶴飼哲『応答する力 来るべき言葉たちへ』、青土社、二〇〇三年

梁石日『アジア的身体』、平凡社、一九九九年

宮沢剛『金時鐘の詩を読む―読むことの「自由」と書くことの不「自由」』、『日本近代文学』第六九集、日本近代文学会、二〇〇三年

倉橋健一『未了生としての人間』、椎の実書房、一九七五年
細見和之『金時鐘詩集「新瀉」論和解の政治学に寄せて』、

(97) 金時鐘『長編詩集 新潟』と「日本語への報復」の関係

『現代思想』二〇〇〇年十一月号、青土社

細見和之『アイデンティティ／他者性』、岩波書店、一九九九年

守中高明『脱構築』、岩波書店、一九九九年

二〇〇四年一月二日受稿
二〇〇五年三月三日をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)